岡山県におけるトラフグ親魚の漁獲状況

トラフグの産卵場は備讃瀬戸周辺にあることが分かっており、春先から初夏に産卵親魚が来遊します。来遊したトラフグは、産卵場周辺で操業される底びき網の他、島しょ部の潮流が速い海域に漁具を固定し、潮に乗って入網する魚を獲る袋待網で主に漁獲されます。

水産研究所では、トラフグ親魚の漁獲状況を把握するため、備讃瀬戸海域を地先とする標本漁協の漁獲量のデータ収集と水揚げされた魚体のサイズ測定を実施しています。2014 年以降の漁獲量について、'21 年まで減少傾向にありましたが、'22 年と'23 年の２年続けて大きく増加しました(図１)。当該海域で漁獲量が増加した原因は不明ですが、水温等の影響が推測されます。

漁獲されたトラフグの全長測定の結果から、上田ら (2010)の年齢と成長の関係式により、年齢組成を確認したところ、雌では３歳以上の高齢魚が大半を占め、雄では１～２歳の若齢魚が多い年では６割近くを占めました(図２、３)。この理由は、成熟年齢が雌は３歳であるのに対して、雄は２歳で１年早く、雌より雄が早く産卵場に集まるためと考えられます。一方で、雄の１～２歳の若齢魚の割合は、'16 年から'23 年の間、59%から 37%まで減少しており、新規加入の減少が懸念されます。

また、国立研究開発法人水産研究・教育機構の調べでは、日本海・東シナ海・瀬戸内海系群のトラフグの資源水準は低位で減少傾向と推測されています。このような状況から、資源回復の取組として、倉敷市児島、下津井地区では'16 年よりふ化仔魚放流が行われています。この取組は、春に漁獲された親魚から採取した卵と精子を人工受精した後、受精卵を水槽で管理し、ふ化した仔魚を産卵場周辺海域へ放流するものです。卵管理や放流は漁業者が中心となって実施しており、今年度は４月に77 万尾を倉敷市地先に放流することができました。また、小型魚を保護するため、漁獲された全長10㎝以下のトラフグを再放流することが漁業者により取り決められています。

今後とも、これらの取組を支援するとともに、トラフグ資源の回復のため、親魚の漁獲状況の把握に努めていきたいと考えています。

（栽培・資源研究室　亀井）

写真　水揚げされたトラフグ親魚

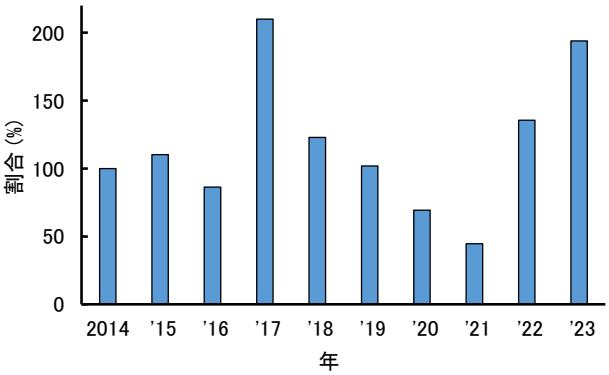

図１　標本漁協における漁獲量割合の推移
(2014 年の漁獲量を 100%とした割合)

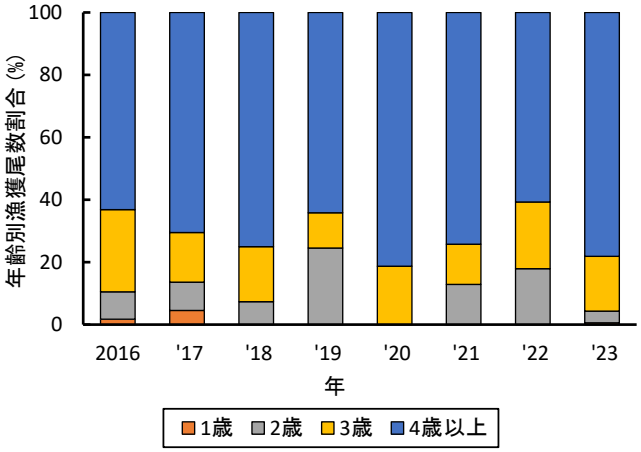

図２　雌の年齢別漁獲尾数割合の推移

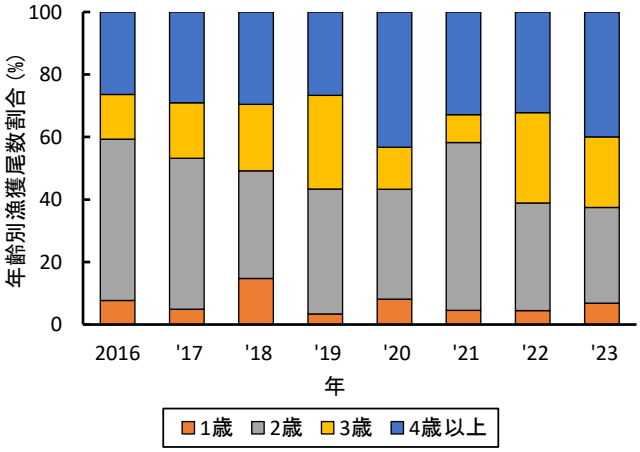

図３　雄の年齢別漁獲尾数割合の推移

参考文献

上田 幸男, 佐野 二郎, 内田 秀和, 天野 千絵, 松村 靖治, 片山 貴士. 東シナ海, 日本海および瀬戸内海産トラフグの成長と Age-length key. 日水誌, 2010: 76, 803-811.